慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世に於ける精神生活(平泉澄著, 至文堂發行)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.3 (1926. 7) ,p.146(452)- 148(454)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260700-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の發掘は、朝鮮の古美術に對する研究に益々その重大性を加へたのである。しかるに從來この方面に關して寫眞や印刷物が甚だ少く、研究者をして甚しき不便を感ぜしめたが、今般總督府博物館の藤田亮策、小泉顯夫兩氏が主任となつて、三國以來の佛教藝術を初め、古墳の遺物、有史以前の遺物、陵墓、殿廟、塔碑、石人石馬等の彫刻等、學問上からも藝術上からも貴重なる材料となるべきものを、總督博物館、李王家博物館、或は個人の珍藏品より撰擇して、それに一々説明を附し、中版寫眞版十枚一組として、毎月發行されることになつたのは、研究者にとつてこの上もなき幸と言はねばならない。すでに三輯まで發行され、その中には石器時代の土器文樣を始めとして、樂浪古墳の出土品、或は慶州石窟庵の本尊など多くの珍しきものが包含されてゐる。（松本芳夫）

綜合日本史概説　上卷（栗原元次著　中文館書店）

著者は本書の緒言において、わが國史が世界無比として誇り得べきにかゝはらず、現代の國民がこの光輝ある國史の成迹を忘却せんとしてゐることを慨き、智識階級にしてその國史に迂なること現時の我國の如きは世界においても稀にみるところなることを説き、その原因の一つが教養ある一般人士に適する國史の良書に乏しきためであるとなし、この缺陷を補ふとゝもに、中等以上の學生や中等教育に從事するものゝ參考に供せんがために本書をなしたのであつて、その記述は時代の下るにつれて稍詳しく、また政治、法制、戰爭、文化等の一方面に偏らないやうに注意し、全體としての國史を説くにつとめたことを述べられた。かくて本書においては、國土及び國民をもつて章を起し、第三十九章豐臣時代の外國關係に筆を擱き、所々に鮮明なる寫眞版と圖解とをもつて興味と理解とを助けてゐる。さうして溫健なる見解の下に、よく史實を統一整齊せる點において、その目的に成功せるものと言ふことができよう。但し吾々が一般讀者として本書をみるとき、そこになほ多少の希望もないではない。例へば黃泉國の意義説明せらるゝ以上は、高天原についてはそれ以上にその意義を説明せられたい。或はまた應神朝の歸化人の場合における百二十縣とか十七縣の縣の如きについても註記せられたい。一般讀者の立場からみて本書の性質上簡單なる説明を要求したい事項は其他にも多く存在する。なほ鎌倉時代の宗教において、一遍上人をあげて融通念佛を説明してゐるけれども、融通念佛としては平安朝の良岡上人をあぐべきではなからうか。しかし慾を言へば限りはない。ついで現はれるであらう下卷とゝもに、國史の良き參考書として推奬し、著者の努力を多とするものである。（松本芳夫）

中世に於ける精神生活（平泉澄著　至文堂發行）

本書は國史研究叢書第一編として公にされたものであつて、平泉氏の帝國大學に於ける講義案を基としたものである。

此處に中世と言ふは、保元以降室町幕府の滅亡まで、卽ち武家武門の興起して公家を壓倒してより、信長の足利氏を追放した天正元年までである。此の時代は後世の人々より暗黑時代と呼ばれ

てゐるが、當時の人々自身も悲觀的心情を有し自ら其の時代を輕蔑してゐたのである。然し新階級の勃興、經濟生活の不安動搖、精神生活に於ける指導的思想等に於て、現代と類似してゐるものである。故に此の時代の精神生活の鮮明は又現代思想に對して重大なる貢獻を爲すべきものである。

先づ中世人が上代より受けた精神的遺產を明にする爲に、上代に於ける教育を見るに、それは官吏の子弟を儒教主義に依て教育するものであつた。而して此の教育の最も盛であつたのは平安朝の初期であつたが大化改新の制が破るゝと共に學問も衰へ、其上當時の學問は訓詁暗誦を事としたものであつたからして、官職を世襲するに至つては全く精神の自由を失ひ沈滯してしまつたのである。中世に至つてはその衰微は甚だしく、大學寮等は廢絕して田畠となると言ふ有樣であり、大學の職員も名譽の職となり、學生も世襲となつて、二三歲の赤兒が學問料を給はることゝなり、從つて公卿僧侶さへ文字を解しない者あるに至つた。かくて中世は全く無學の時代であり思想の溷濁した時代であつた。只に學問の衰微ばかりでなく經濟的にも政治的にも公家階級が衰へた時上代憧憬の心境が各方面に强烈に現はるゝに至つた、即ち日記が學問の對象となつて、非常に高價なるものとなり、有職書の編纂が數多く行はれ遂には王政復古の運動となるに至るのである。上代憧憬の念より出でた日記の研究や有職の調査は主として公家階級に限られたものであつたが、一般民衆の上代に對する憧憬は古典の研究を誘起するに至つた。賴長、花園院天皇、三條西實隆等の讀書目錄を比較すれば上代の讀書人の目は主として外國のものに向けられたが中世に入つては次第に我國の古典に向けられた有樣を知ることが出來る。かくて萬葉集の研究や古今集に對する景仰が盛となり今古集の註釋本も數多く著はさるゝに至り、その尊重の結果は古今傳授の如きことが行はるゝに至つたのである。又小說に於ても伊勢物語が愛讀せられその註釋書も多く著はされた。然しそれにもまして源氏物語は熱愛され少女にも武士にも愛讀され、その註釋その續編その模倣小說等數多く著はさるゝに至つたのである。かくの如く中世憧憬の的は上代の文化となり、復古の企となつたが、その實現の不可能は現代の嫌惡となり現世否定となつた。即ちこのうつし世を雷光朝露夢幻の果敢ないものと觀じ此世を遁れてひとへに後世を願ひたいと言ふ思想が盛になり、遂には源氏物語をも宗教化して、これは中道實相の深遠なる哲理を述べたものであつて、その戀愛の葛藤を叙述してゐるのは世人を導く方便に過ぎずとなし、源氏物語願文の如きものが生ずるに至つた。源氏ばかりではなく今古集も又宗教化して一首の和歌を作ることは一體の佛を作るに同じと考ふるに至つた。かく中世の人々が此等宗教的ではないものをも强ひて宗教的に解釋し、其作者を神聖視するに至つたのは、上代に榮えた貴族文化が今や中世には入つて佛教文化の爲に屈服せられたものである、即ち宗教意識が過敏であつた爲に上代の文學的價値は中世に於て宗教的價値に變化したのである。而して此の宗教意識を喚起したのは僧侶が當時の教育を掌つて年少の子弟を實際的に教育したからである。

從來中世に於ける唯一の教育機關と考へられてゐたものに金澤文庫と足利學校がある、然し平泉氏の研究に依れば金澤文庫は公

開のものではなく只金澤氏の舊藏書と稱名寺傳來の書籍を保存したに過ぎず、又足利學校も僧侶の研究室であつて共に一般教育とは無關係なることが明白となり從來の謬見は打破せられたのである。而して中世に於て一般世人を教育したものは實に寺院であつた。それ故寺院の住職なる僧侶こそ中世人の精神生活の指導者であつた。寺院學習の有樣は玉置吉保の自叙傳である身自銘に詳である。尙注意すべき事は僧侶は少年が教育を終へて社會に出てからも之を指導したことである。中世に於ける寺院教育の影響の如何に大であつたかは寺院より生じた新しい言葉が非常に多く世間に用ひらるゝを見ても明である。かく中世に於ける教育の全權を握り國民の精神生活の指導者の位置を占めてゐた僧侶は極めて多數であつたが又驚くべき程無學であつて、童子教註抄に示された如く荒唐無稽の說をなすものがあり、又その歷史的知識の缺乏は我國萬世一系の皇室も楠木正成も知らず且又道德的にも甚だしく墮落してゐたのであつた。かゝる指導者に依て率へられる一般國民の心が上代の末、中世の初めに於いて氣色を失つて倦怠の氣と悒鬱の情とに充ち、恐ろしく厭世的となつたのは當然のことである。かくて迷信が行はれ、更に陰陽道や宿曜道並に末法の思想が盛となり、中世人はその精神生活に於てまことに暗黑の時代に住んだのである、方角にも年、月、日にもそれ〴〵一定の性質があり、一定の作用をなし人間の生活に影響し、人の運命を支配し人は自由を奪はれて全然無力なものとなり、總ての光明を失ひ希望を棄てゝ厭世的となり絕望的となつたのである。實にかゝる亡國的思想に依て中世人は支配さるゝに至つたのであつた。而して此の暗黑の中の光明として現れ、我國を滅亡より救つたものは武士であつた。即ち武士は上代文化の墮落的傾向に反對して立ち、遂に別個の人生觀、別個の價値觀、別個の道德を創造したのであつた。そして此の武士道の精神を信仰上に基礎づけたものは實に禪宗であつた。神佛に祈願して幸福を求め往生を求める代りに我身を反省して向上せしめんとするに至り、宗教的情熱より道德的鍛錬を尊ぶことゝなり、中世初期の悒鬱倦怠の氣に充ちた厭世思想とは全然世界を異にするに至つたのである。

以上は本書の內容の大略である。本問題は從來殆んど閑却せられてゐたが、此の問題の理解は國史全體を貫くものであり、又現代思想とも密切なる關係を有するものであるから、之を深刻に解剖し、明快に裁斷することは、我々にとつて最も必要なことである。氏が此問題を捕へて之を鮮明せられたのは、大なる努力と言はなければならない。特にその史料の豐富なる點、之を縱橫に解剖し判斷したる點は敬服に價するものである。又中世に於ける和歌小說等の流行及びその宗教化の事情、僧侶の本體及其の活動の狀態、金澤文庫、足利學校の教育上の價値等新研究として認めらるべきものが多くあるのである。多少繁雜に過ぎる位史料を本文に引用した事又は多少冗漫に過ぎた嫌があると思はるゝ所もあるが、此は氏の研究心の然らしむる所であつて、氏の努力に敬服こそすれ、本論の價値を減ずるものではない。兎に角本書は新人の新研究として十分推奬するに足るものである。又最後に大なる抱負を以て國民研究叢書刊行を企てた至文堂主人に敬意を表するものである。（今宮新）